



令和7年度

鹿児島県教育

9月号

巻頭言



負担ではない「負荷」を楽しもう
～教員としての力を高める負荷を見つけて～

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部会長

鹿児島市立田上小学校

佐土原 隆

今年六月の県大会、七月の九州大会と、立て続けに算数の研究大会に参加した。両大会で特に印象的だったのは、研究発表者や授業者の先生方が非常にいきいきとしていたことだ。発表では、自信を持って実践を語り、参加者との討議も堂々として行っていた。授業では、他校からの飛び込み授業であっても、先生方が子供たちと共に授業を楽しみ、練り合い、高め合う姿が見られた。

もちろん、発表や授業の準備には多くの時間と労力がかかったはずだ。実際、授業者が「当日朝まで迷っていた」と語る場面もあり、県大会の授業は、指導主事や学校の職員と長期間かけて作り上げたという話もあった。それでも、先生方が明るい表情で臨んでいたのは、自ら主体的に授業のあり方を考え、追求し、実践することを「楽しんでいた」からだろう。そして、授業を通して自分の成長を実感し、子供たちの満足そうな表情や、彼らの言葉から新たな学びが生まれる瞬間に、「教師としてのやりがい」を感じていたのではない。

近年、業務改善が時短や行事削減に偏り、「教育の質の維持・向上」という本来の目的が見失われているのではないかと危惧している。研修さえも「負担」として軽減の対象とする傾向があることも懸念材料だ。しかし、

教員にとって研修は、法に位置付けられていることはもとより、職の魅力を高め、自身の力量を伸ばす貴重な機会である。特に、地区の研究団体で同じ教科等の実践を持ち寄り、成果や課題を共有する経験は、日々の授業の小さなPDCAを意識しながら指導を振り返る貴重な機会となる。また、そこでの他校の先生方との出会いは、教員としての大きな財産である。こうした教育実践の蓄積や交流が、今後も教員の自己研鑽の場として県全体で多くの教科等の研修会で継続し、更に盛り上がるよう、校長として支援していきたい。

筋トレやスポーツと同様に、教員も自らに適度な「負荷」をかけることで成長できる。教育に関わる様々な事象や対応を「負担」ではなく、自分を高めるために必要な「負荷」として前向きに捉え、成長の機会として「楽しむ」ことができれば、子供たちの笑顔も、教員としてのやりがいも更に大きくなるだろう。教員不足など、様々な教育課題は、我々教員が経験年数や課題に応じた負荷の中で成長し、授業や教育活動に笑顔で取り組み、楽しむ姿により、解決に近づくと思っている。「さあ、自分なりの負荷を見つけて、成長していく教員・自分を楽しもう」と職員に語ってみよう。

令和7(2025)年9月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

随想



与論町海洋教育推進協議会 会長 池田 剛

父の転勤で沖永良部島、奄美大島、鹿児島市、与論島で育ち、高校卒業後は福岡の専門学校で学び、半導体企業に就職しました。二十代後半にはバックパッカーとして海外を巡り、世界の広さを身をもって体感し、三十代で「豊かに暮らせる場所」として選んだのは、故郷の与論島です。ゆんぬんちゅ（与論人）には、寛容さと誠の精神が根っこにあると思います。杵からはみ出たことをしても、「おもしろい」と受け止めてくれる度量があり、知識も経験もなかった私に、様々なことに挑戦できる機会を与えてくれました。この与論島の風土は私を形づくり、今の活動を支える原点となっています。

与論町は、自然、歴史、文化、産業、生活上の様々な面において海との関わりをもっています。この島の特色を活かし、与論町の各学校では海そのものや、海に守られた自然、文化、そして、海と共に生きる地域の人々を素材とした探究的な学びとして、海洋教育「ゆんぬ学」を実施しています。私は現在、与論町海洋教育推進協議会の会長を務めています。本協議会は、「ゆんぬ学」の目指す姿や方向性を共有し、実践事例の情報交換や、学校と地域との連携・協働を推進する中核的な組織です。

「ゆんぬ学」の「ゆんぬ」は与論を意味します。与論町の強みは、「ゆんぬ学」が教員だけの取組にとどまらず、行政や島内外の団体、そして地域住民が加わる「チーム与論」として取り組み、子供たちの未来のために町ぐるみで学びをサポートしていることだと思います。その一環として、今年の六月には第三回海洋教育魅力化セミナーを開催しました。セミナーでは「ゆんぬ学」の意義や可能性について理解を深めることを目的に、与論高校卒業生によるパネルディスカッションを行いました。登壇した卒業生からは「視野が広がり、学ぶ意欲が高まった」、「探究の経験が今の行動力につながっている」といった多様で前向きな声が寄せられ、「ゆんぬ学」の果たす役割の大きさを改めて実感しました。また、教職員の成長に寄り添い、伴走してきた先生方が、その姿に感動している様子を目にし、私自身も大きな喜びを感じました。

さて、子供たちの探究活動に触れる中で、「自分の探究テーマは何だろう?」と考えてみました。真っ先に思い浮かぶキーワードは、私の職業とも深く関わる「地域づくり」です。私はNPO法人ヨロNSSCに勤務し、与論町内の奄美群島国立公園に新しく建設された観光施設の事業に携わっています。国立公園という特別な環

略歴

与論高校卒業後、九州電気専門学校を経て半導体企業に勤務。オーストラリア・ニュージーランドでのワーキングホリデーを経験後、与論町役場教育委員会に臨時職員として勤務。その後、NPO法人ヨロNSSCに就職し、地域スポーツや教育、地域振興事業に携わる。現在、与論町海洋教育推進協議会会長、与論町主任児童委員

境に立地しているため、自然や文化への敬意を大切にしながら環境に調和した施設づくりが求められます。一方で、新しい施設への期待に応える独自の価値も創りたい。その狭間で悩み考えながら、行政、民間、地域住民など多様な方々と対話を重ね、「与論だからこそできる地域づくり」のあり方を模索しています。新しい挑戦の中で、専門外のことも多く戸惑うことばかりですが、探究的に物事を捉えることで、日常の出来事や出会いが発見や学びへとつながり、仕事にも活かされていることを実感するとともに、生涯にわたり探究する社会が到来しつつあると、ここ与論においても感じています。

与論島には高校までしかなく、高校卒業とともに多くの子供たちが親元を離れ「島だち」をします。そのため、与論の子供たちには「たくましく、しなやかに生きていける人に育ってほしい」というのは、島に暮らす大人たちみんなの願いです。子供たちの探究活動は、やがて大人になってからも続いていく学びの営みだと思います。これからも子供たちの「島だちの力」を育むとともに、大人や地域社会も一緒に学び合うことで、島のよりよい未来づくりに貢献できればと願っています。



教児共に「幸せ実感する」学校を目指して

針持小(始伊) 工藤 美保

一 はじめに

新任校長として熱意と共に責任の重さを感じながら、四月に着任した。そんな中、保護者や地域の方の思いに触れる機会があった。児童数が急激に減少し、昨年度よりも半分の全校児童六名となってしまったことへの不安が伝わってきた。「たった六名で、かわいそう。」という声も聞こえてきた。

しかし、この数か月間、子どもたちを間近で見ていると、みんな笑顔で、毎日楽しそうに学校生活を過ごしている。たった六名だからかわいそうだと思うのは、大人の考えであって、子どもたち自身は、かわいそうなんて思っていない。極小規模校でも子どもや教職員が「幸せ実感する」学校であれば、保護者や地域の方も安心でき、子どもたちの成長を見守りながら幸せを実感できると感じた。

二 極小規模校の強みを生かして

極小規模校の強みは、少人数だからこそできる一人一人を大切にしたいきめ細やかな指導や個性を尊重した授業づくりである。また、子どもと教職員のコミュニケーションが密になりやすく信頼関係が築ける。さらに、学校

や保護者・地域との連携も密になり、特色ある教育活動が展開できるなど子どもを中心とした学校経営ができることが楽しみである。

(一) 個別最適な学び

アセスメントシートを活用した丁寧な分析・実態把握から、学習に対する苦しさやつまずきの要因を把握し、個に応じた指導を行う。また、子ども一人一人の特性や興味・関心に応じた自己選択、自己決定の場を設けることで、子ども自身が学習を進めていく学びへと向かい、自己肯定感が高まる。

(二) ICTを活用した協働的な学び

学習者用端末や大型提示装置を用いて、自分の考えをまとめ、異学年での発表・交流を行う。また、オンライン授業を活用した小規模校同士の他校との交流による協働的な学びを積極的に実施する。

(三) 支持的風土のある学習環境

学力検査の結果だけに焦点を当てるのでなく、学習過程を重視した学習環境を整えることが大切である。子どもと職員・子ども同士の距離が近く、コミュニケーション

ンが密になり信頼関係が築きやすい。そのため、安心して何でも言える雰囲気や関係ができる。また、失敗を恐れず挑戦したり、積極的に他者と関わり、協力し、助け合ったりする環境にあるため、子どもたちの「幸せ実感」を高めることにつながる。

(四) 体験学習の重視と地域との連携

自然環境や地域とのつながりを大切にした体験学習や探究学習を通して、知識やスキルを身に付けることができる。例えば、米作り関連の田植え・稲刈り・脱穀などを老人クラブの方々と一緒に体験することで、世代間交流を深め、食の大切さや農業への理解を深めることができる。また、子どもたちは貴重な経験を通して、深い学びとなり、更に郷土愛を育むことができるため、子どもたちにとっての「幸せ実感」を育むことにもなる。

(五) 日課表の見直しによる働き方改革

教育の質の向上は、授業改善と業務改善である。そのための日課表の見直しを行う。全職員の意見をよく聞き、意見を反映した日課表の見直しを実施する。日課表の工夫により教職員の主体性を高め「幸せ実感」へとつながることを期待している。

三 おわりに

来年度、本校は創立百五十周年を迎える。歴史と伝統ある学校で学んだ子どもたちが、母校に対し誇りと愛着をもち、学び舎を巣立つことができることを目標に、教児共に「幸せ実感する」学校・笑顔あふれる学校となるように今後も取り組んでいきたい。



語り合う中での関係性づくり

榕城小(熊) 横山 政文

一 はじめに

京セラを創業し、後に経営の神様と呼ばれた稲盛和夫氏は、その経営哲学として「謙虚にしておごらず さらに努力を」という言葉を残している。経営者として様々な決断に迫られたとき、「人の行いとして正しいのか、善いことなのか。」という人間として守るべき価値観を尊重して判断していたとも言われている。

顧みて、学校経営においてリーダーシップが求められる私たちはどうであろう。未来を担う子供たちや教育現場とともに働く教職員の働きがいにとって、校長職としてどのようなアプローチが必要なのか、考えてみたい。

二 子供との向き合い方

子供たちが生き抜く社会は、デジタル情報化が益々進み、SNSやAI機能がより日常化され、会話が無くても事足りる場面が増えていくであろう。だからこそ、学校でも家庭でも地域でも、直接対話によって自分なりの言葉で相手に伝え、同時に、相手の話す内容等もしっかり聴き取る確かな力が重要となる。人とのつながりや関係性を基にした協働性、社会貢献意識等も大事にしたいものである。

三 教職員との向き合い方

そのために、子供たちの学校生活や集団活動での行動を見届け、常に自ら話し掛けるようにしたい。わずかな時間でも子供たちに笑顔で語り掛け、必ず、子供の言葉を引き出すのである。そして、その時々々の機微に触れることでその子の思いに寄り添うようにしている。善いことがあれば共感して喜び合い、それを担任らと共有する。課題があればすぐに改善策を検討し、スピード感をもって真剣に対応する。子供たちに大人の本気を見せて取り組むことは、自ずと一歩前へ踏み出すことにつながる、学校としての成長戦略にもなり得る。

学校経営方針を都度提示して学校運営の方向性を共有するように努める。私自身もそうであるが、概ね教職員は専門性が強く、自分の実践や成功体験をいつまでも繰り返して自己更新できないことがあるように思われる。そのために、時宜を得た学校運営の方向性を示しながらベクトルがブレないようにし、教職員同士がコミュニケーションでつながる場を意図的に準備することを意識したい。例えば、これまで各学年教室で行っていた学年会を職員室で実施することで、他学年との調

整や連絡が円滑に進むように改善した。出勤時や退校時等には、授業や校務等について個々人への労いや励まし、教職員間での対話を促す言葉を添える機会を増やすことで、同僚性が高まるきっかけとなった。働きがいを感じる職場とは、誇りもって仕事に取り組み、認められている実感があるときである。時間を創ることができる校長職において、人と人との関わりを最優先にすることで、学校が活性化していることを実感している。

また、本校では、授業改善として、子供自身が、何をするのかという自己目標を立て、どうやってするのかという自己選択・自己決定を経て、どうだったのかという自己省察で振り返りを行うことで、自ら学びを創る子供を育てようとしている。学習者主体での教師の発問や切り返し、共感の中で可能な限り学習を委ねる姿勢など、組織として職員研修を推進していくことも関係性づくりに効果的である。

四 おわりに

来年百五十周年を迎える本校には、初代校長である前田豊山先生の遺訓「人信無くんば立たず 規律を慎み 礼儀を厳とす」という教育理念が受け継がれている。事を成すためには、必ず一緒にやってもらえる人や手伝ってくれる人が必要であり、それは、信任を得て初めてできることである。今後も単純明快なリーダーとして常に語り合い、おごることなく子供の学びや教職員の働きがい考えた学校経営に向け、更に努力を重ねたい。それが、校長職のやりがいでもあると思う。



たくましく、
けんこうな心で、

「島立ち」する子どもを育む

三島竹島学園(郡) 四 元 包 徳

一 はじめに

三島竹島学園は、本土から四十km南にある三島村竹島の義務教育学校である。全校児童生徒数十一名という極小規模校ながらも、「たくましく、けんこうな心で、島立ちできるまなびの学園」をキャッチフレーズに掲げ、児童生徒一人一人が自らの可能性を最大限に伸ばせる環境づくりに取り組んでいる。

本校は、地域と連携した特色ある教育活動やICTを活用した遠隔学習、極小規模の義務教育学校ならではの柔軟な指導体制などを通して、教育課題の解決に向けて取り組んでいる。

二 学校経営の概要

本校の教育目標は「心豊かでたくましく笑顔いっぱいの子どもを育てる」である。校訓を、「よく考え 思いやりがあり がんばりぬく子」とするとともに、「子ども全員のための学校」「開かれた地域の学校」「安全で美しい学校」をめざす学校像とし、その具現化を図っている。

具体的には、極少人数学級という特性を生かし、児童生徒の実態を丁寧に把握しながら、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改

善に重点を置いている。

また、ICTの効果的な活用による遠隔授業や、後期課程の教員による前期課程の授業への乗り入れなど、限られた人的資源を最大限に生かした教育体制を構築している。

さらに、児童生徒理解のための教育相談やアンケート、「学校楽しい」となどの定期的な実施やSCの活用等を通して、一人一人に寄り添う支援体制を整えるなど、人権尊重の精神に立脚し、「個を見つめ、関係を築き、共に育つ」学校づくりに努めている。

三 本校の特色ある取組

本校の特色のある取組として「地球(ジオ)科」があり、その一つに「ハマギプロジェクト」がある。「ハマギ」とは、竹島で古くから自生している健康長寿の薬草・長命草(通称ボタンボウフウ)のことであり、本校ではこれを教育素材として活用している。児童生徒は、令和二年度から地域住民やNPO法人と連携して、ハマギの収穫を行い、ハマギを使ったオリジナル商品「ハマギ餃子」の開発に挑戦している。商品名やパッケージデザイン、販売に至るまで、全て児童生徒が主体となって進めており、地域活性化とキャリア教

育を兼ねた学びとなっている。

また、「地球(ジオ)科」では、アフリカのギニアの伝統楽器ジャンベの演奏活動や三島村ジオパークジュニア検定、ALTとの日常的な英語交流、竹島の自然を活用した活動「筍採り」に取り組んでいる。本校では、「島にあるすべてが教材」であるという考えのもと、ふるさとに誇りをもち、島外へ発信する力を養っている。

令和七年六月には、大阪・関西万博「ギニアシヨナルデー」のステージで、本校の児童生徒が三島村の他の三校の児童生徒と共に、ジャンベ演奏を披露した。世界とつながる経験を通して、「多様性」や「共生」を児童生徒自身が体感する貴重な機会を得た。

題名にある「島立ち」とは、島を離れても自分らしく力強く生きることであり、このような経験の積み重ねが、未来を切り拓く力の育成へとつながっている。

四 おわりに

現在、グローバル化やICTの加速度的進展など、社会の急激な変化に伴い、高度化、複雑化する諸課題への対応が求められており、学校教育においても多様なベクトルが存在している。そうした中で、三島竹島学園は、規模の小ささや地理的条件を生かして、「ここですしかできないオンラインワンの学び」を実践している。

今後も、子どもたちが笑顔で、たくましく「島立ち」できるよう、教職員一丸となって学校経営の充実を図っていくとともに、極小規模・離島校の可能性と魅力を再認識し、多様な教育の在り方を考えていきたい。



「自己効力感を引き出し

高める学校」を目指して

兼久小(大) 福 健一郎

一 はじめに

本校は、徳之島の天城町の南部に位置し、学校周囲は徳之島の基幹産業であるサトウキビ畑に囲まれ、校区内には牛舎や名産のマンガ・パッションフルーツ畑等も点在している。令和三年度には、奄美大島や沖縄諸島と同時に世界自然遺産に登録された日本有数の自然に囲まれ、校区内には生きた化石と呼ばれる「アマミノクロウサギ」の生息地も存在している。今年度の児童数は六十四名であり、一・二年単式学級、三・四年、五・六年が複式学級の全七学級（うち三学級は特別支援学級）の小規模校である。

二 学校経営の基本方針

学校教育目標は「夢や目標をもち自ら高め合う子供」、「子供たちの「自己効力感」を引き出し、「自分はできる」と自信を基に、なりたい自分を具体的な夢や目標として決めて、成長していこうと友達と共に協力しながら、自ら考え、粘り強く行動できる子供の育成を目指している。

三 令和七年度の経営の重点

(一) 思いやりと規範意識の育成

ア 生徒指導の実践上の四つの視点に留意した授業の推進

イ 「自分の生き方」に対する考えを深める道徳授業の推進

ウ 地域の人材や素材を活用したふるさとを誇りに思う教育実践

(二) 健やかな心と体の育成

ア 運動能力調査結果を受けた教科体育や業間活動における補強運動の実施

イ 健康的で規則正しい生活習慣の確立のための健康教育の充実

ウ 実態や状況に即した危機管理マニュアルの共通理解

(三) 確かな学力の定着

ア 「質の高い分かる授業」づくりのための授業力の向上

イ 表現力（書く力）の向上や語彙力の向上

ウ 読書時間の確保と学年に応じた読書の量と質の向上

四 本校の特色ある取組

(一) 縦割り集団登校

安全な登校の実施及び相互扶助の精神、規範意識を養うことをねらいとして、同じ集落の子供たちで班をつくり、毎朝異学年集団での集団登校を継続して行っている。

(二) 校区音読放送

子供の表現力の育成及び地域へ子供の様子を伝えることをねらいとして、地域へ朗読の声を届ける音読放送を行っている。

(三) シマの時間

郷土の自然や伝統・文化のよさを捉え、自らも受け継いでいこうとする態度を育むために、地域の方々を講師として迎え、島口、島唄、伝統芸能等の体験活動を行っている。

(四) われんきやガイド

校区に対する愛情や誇りを養うために、校区内の自然や文化、歴史などについて調べ、島内外の人たちに紹介する活動を総合的な学習の時間に実施している。

五 おわりに

今後の教育活動においても「自己効力感」を高める活動に繋がっているか精査しながら、教育課程編成を行っていききたい。



発明工夫の本名小

本名小(市) 野口 貴弘



一 はじめに

本校は、鹿児島市の中心部から北に十五kmのところに位置し、周囲を山に囲まれた自然豊かな環境にある。今年で創立百四十六年を迎える歴史と伝統ある学校である。児童数は減少傾向で、現在百七十八名。通常学級六学級、特別支援学級四学級、計十学級の小規模校である。

学校教育目標は、「豊かな心と確かな学力をもち、心身ともに健康で生きる力を身に付けた本名の子どもを育成する」である。キャッチフレーズ「発明工夫の本名小」のもと、家庭や地域と連携しながら、特色ある教育活動を進めている。

二 本校の取組

日常生活で、自然法則を科学的に利用したものを考えることを通して、創作の喜びや発明工夫の楽しさを知り、子どもたちの創造力を育てることを目的とした取組である。「こんなものがあつたら生活が便利になる」などの発想を子どもたちが絵に表す時間を「発明工夫の時間」として設定し、「鹿児島県発明くふう展・絵画の部」に一九八〇年(昭和五十五年)から四十五年間継続して全員が出品している。学校のイメージキャラクターも「発

明君」となっており、発明工夫の取組が地域にも親しまれながら浸透している。

三 取組の実際

(一) 年間を通しての活動

四月のオリエンテーションで、アイデアアカード(絵と説明)と六年間作品を描きためていくファイルを配布する。教育課程の位置付けは、一・二年生が生活科と創意、三・六年生は総合的な学習の時間である。また、毎月第一月曜日の朝の活動十五分間でも自分のアイデアを考えている。

(二) 土曜参観日の作品作り

六月の土曜授業日に県「発明くふう展(九月)」への出品に向けての作品作りを保護者と一緒に行っている。一校時は各学級での説明やアドバイスを受け、二校時は各家庭ごとに長子学級や特別教室に分かれて活動している。

(三) 作品鑑賞会

九月のPTAの日に、体育館に全員の作品を学年ごとに並べ、相互に鑑賞している。異学年の作品を見るところを通して、着眼点や工夫されているところに気付かせるようにしたり、自分の作品への評価を聞いたりする機会にしている。また、保護者にも全

学年の作品を見てもらい、各家庭でも話題にすることを通して子どもに更なる創作意欲を喚起することにつなげている。さらに、校舎内の一角に「発明工夫コーナー」を常設し、県民週間や学校運営協議会開催時に地域の方にも鑑賞していただき、意見をいただいている。

(四) 発明くふう展への出品・授賞式

出品数に制限がないため、全員の作品を出品している。令和五年度まで毎年のように県の発明協会より学校賞をいただいていたが、令和六年度から、「絵画の部」は県で審査されずに、全国の「未来の科学の夢絵画展」に直接出品されるようになった。

令和六年度は、二名が入賞したが、より多くの子どもたちに創作意欲をもたせ、特色ある教育活動の伝統を受け継いでもらうために令和七年度から校内でも審査会を行い、表彰することにした。

四 おわりに

私が赴任した令和六年度に、学校賞が廃止される旨、協会より説明された。伝統を引き継ぐことのできない何とも言えない無念さが湧いてきた。令和七年度の教育課程編成では職員から、本取組の縮小意見も出た。しかし、保護者には本校卒業生も多くおり、当時の取組を自身の思い出として懐かしく話してくれる。長年続いてきた本校の伝統的な取組は、子どもたちの心に残る学びとなり、学校の誇りとして未来へ継承すべきものであると考える。本校の特色ある取組を未来へ繋ぐため、子どもたちの創造力を育む教育を今後も大切にしなが



志(夢)実現のために考動できる生徒を

目指したキャリア教育の取組

舞鶴中(始伊) 川 畑 勇 司

一 はじめに

平成十五年に国分中の大規模解消により分離新設された。北には霧島連山、東には縄文遺跡のある上野原台地、南には錦江湾に浮かぶ桜島の雄大な自然に囲まれた国分平野のほぼ中心にある。近隣には大きな工場があり、学校周辺は、急速に住宅地化が進んだことで、生徒数が増えてきており、現在八百三十一人である。

霧島市は、地元高校や企業と連携した「霧島しごと維新」という事業等、キャリア教育の充実に力を入れており、本校でも市や地域と連携したキャリア教育の取組を進めている。

二 「志の実現」のための取組

(一) かがやきプロジェクト

ア 地元の高校訪問

校区内にある地元の高校を訪問することで、高校生活や学科の特徴を知ることができる。それが、将来の夢実現に向けた具体的な目標設定への意識付けにつながっている。

イ ふるさとの達人に聞く

毎年、地元企業の経営者に職業人とし

て必要な資質等や企業の進めるSDGsの取組についての話を聞いている。企業理念を含め、個人の思いだけでなく、社会を支える職業人としての自負を肌で感じ、将来の自己有用感を目指した夢実現への意識が高まる取組となっている。

ウ 仲間づくり実習

四小学校から入学するため、毎年一年生で実施する。地元の第一幼児教育短期大学の先生や学生を講師に招き、いくつかのエクササイズで気持ちをほぐし、コミュニケーションスキルについて学ぶ取組をしている。

知識や技術(学力や体力)だけでなく夢や希望を実現するために必要とされる人間力を磨く機会と考えている。将来に向け、AIにできない社会人の資質として人間関係づくりを意識させたい。

(二)

高校のSSHから学ぶ「探究」

SSHの指定を受けているすぐ近くの国分高校と「中高連携における相互交流に関する連携協定書」を交わしており、理数分野を中心とした高校の、レベルの高い探究のプロセスを学ぶ場を設定できている。

(三) 職場体験学習

地元の高校であり、本校の卒業生が多数在籍している。探究のプロセス以上に、身近な先輩が身の回りの疑問や課題を斬新な切り口で研究していること自体が、生き方としての学びにつながると考えている。

本校では、二年生で職場体験学習に向けた調べ学習や、地元の受け入れ企業や事業所への依頼等を進め、三年時の五月に実際の体験ができるように計画している。生徒数が多く、事業所数も二百四十を超えるため、商工会や保護者に協力を得て開拓している。地元の事業所は快く受け入れている。

(四) 地域とともに

市主催の「君の夢を叶える高校フェア」、「企業見学会」、「十年後の自分探し」等に多数参加させてもらっている。

また、商工会主催の「夏祭り」のお神輿にも参加させてもらい、由来を含めた地域理解の学習と地域貢献への思いを学ぶ機会にしている。

三 おわりに

本校は、本年度からコミュニティ・スクールとなり、学校運営協議会で地域とともにある学校として協議を重ねつつある。双方方向の課題解決に向けた協力体制を整え、地域学校協働活動を含めて、生徒の志実現に向けて連携を深めたい。

今後も、市の事業をはじめ、地元の資源を有効に活用したキャリア教育を進めたい。

心に残るひとこと



あなたはすごくないけど

あなたの周りはすごい人たちだから

天降川小(始伊) 大山 政弘

三十三歳、西之表市教委、初行政の始まりは全てがちんぷんかんぷんだった。県市の二足の草鞋を履く私に、電話口では熊毛教育事務所上司の「おう。あれはどげんなっちゃって。まだけ。」の超怖い低音ボイスが茶飯事で、「何度もすいません。」と自分の非力を憂えていた。教諭の頃はいっぱしのつもりだった。論文は連続掲載、県最優秀賞で国の賞状をもらい、長研の成果はK町の指導計画になった。天狗の勢いそのままに赴任したが、次元の違いにいきなり鼻っ柱を折られ、凹んだ。

ある日の夕方、一人居残りをしていると、フ

ワツと前に座る人がいた。有島教育長だ。体育会系「目上に話しかけるべからず」の私は、普段から私事で接近することもなく、驚いた。

「何しているの？」と声がしたので、恥ずかしながらふがいなさを語った。すると、ニヤツとされ「そりやそうよ。あんたはすごくないけど、周りはすごい人たちだから。」と一蹴された。「仕事はね、『自分が自分』でしない。あんたは下手でも、周りは上手な人だらけ。頼らんね。謙虚に報・連・相よ。」と笑われた。机上に長研でお世話になった三宅室長の葉書を、意味も分からず挟んでいた。「行政は無我の境地」と一言だけ書かれていた。初めて染みた。

振り返れば、ごそごそ這い回りながらも、長い間学校の外で学校教育、社会教育、社会体育、人事管理と一通り勉強させていただいた。中には「私は教員か？」といった仕事もたくさんあった。おかげの棚ぼたで、多くのすごい人たちと知り合えた。自分では見ることのない、雲上の風景も教えてもらった。校長となり、子供や職員、周囲の方々を前にして、何事にも代えがたい、ありがたい経験だったとつくづく感じる。

そして今、人に語るときには、「私は」ではなく「〇〇先生は」をよく使う。他力本願かもしれないが、よほど説得力がある。見たことがない世界の話もしてあげられる。だから、これからは有島先生のようなすごい人たちに名を借りて、大事に、話をつないでいこうと思う。

憂きことのなほこの上に積もれかし

限りある身の力試さん

上城小(大) 川 畑 めぐみ

二十年と少し前に父が亡くなった。がんと診断され、あと二か月と告げられた。自宅で療養しながら、病に負けそうな自分を奮い立たせようとして、わたしたち家族に話してくれた一首である。作者とされる江戸時代の陽明学者、熊沢蕃山は藩政改革などに携わったが、朱子学との対立や反対派からの批判を多く経験した人物である。進めようとするのがなかなか実現できない中でも、挑戦を続けようとする意志が詠まれている。

恥ずかしながらわたしは、父に知らされるまで、「江戸時代の学者」という人に全く興味がなく聞き流していた。二か月の闘病で父は旅立ち、残した言葉や行動を家族で想起しながら闘病中の父の思いを語り合った。

その後、管理職を拝命し、きつくて辛いときに、この歌を折々に思い出すようになった。炎天下で草刈りをしながら、氷点下の校庭でうさぎの世話をしながら、難題に答えを見つけようとしながら、力のない自分にがっかりしながら。そして、気付いた。

人は言葉によって自分で自分を励まし希望をもち、奮い立たせ、絶望せずに生き続けようとする事ができるということである。父は仕事や読書でこの言葉を獲得したのであるが、わたしは父の与えてくれた言葉で管理職生活を絶望せずに続けられている。

子供たちが大人になったとき、自分の内側に自らを支える言葉をもっていてほしい、という願いから、毎月の詩を暗唱させている。いつか、幸福感を感じられなくなった時や、誰も味方がいないと孤独感を募らせた時に、内側からにじみ出てきて勇気を奮い立たせ、希望をもてる言葉をお供たちにもたせたい。どの詩をもたせようかと子供向けの詩集を見るようになった。わたし自身も新しい詩との出会いを楽しみながら、自分を支える新たな言葉に出合っている。

背中を押したひとこと

阿久根中(北) 松下 幸男

美術教師として二校目に勤務していた頃、大学時代の教授から声を掛けていただき、同じ研究室の卒業生や大学生の小作品を、画廊で展示してもらえる機会に恵まれた。

離島の極小規模校で、公募展等から遠ざかり、

美術以外の教材研究に多くの時間を割いていたため、「美術教師の原点、本質を忘れるな、奮起の機会にせよ」という教授からのメッセージだと受け止め、作品を描いたことを覚えている。島で描いた作品を抱え、十四時間ほどかけて船に揺られ、そのまま研究室を訪ねた。恐る恐る教官室の扉を叩くと、教授は笑顔で出迎えてくださり、安堵したことが思い出される。

教授は、大きな岩山を描いた私の絵に目を留め、「これだよ!」とひととき大きな声で頷くように言われ、「対象の捉え方がよい」といった意味合いの言葉で、少々大げさに、そして嬉しそうにほめてくださった。

さらに、研究室にいた学生を集め、「これを見てみる」と話し掛けられた。そこまで大げさにしなくても……と、教授の背中を見ながら恥ずかしく、居たたまれない気持ちになったが、教授なりの励まし方なのだろうと感じた。その作品は今も実家の玄関に飾っており、帰省するたびに当時の情景が鮮やかに蘇ってくる。

次に教授と再会したのは、その五年後。意識が戻らない病室で、二度と教授の声を聞くことはできなかった。

離島勤務を終え、三校目は鹿児島市内であったため、いつでも会えるという思いから、すぐに教授を訪ねずにいた。今となつては、そのことが悔やまれる。

しかし、美術教師として、その後も自分を高

めるために絵を描き続けることができたのは、あの時の一言があったからだと感じている。未熟な自分を顧みながら、人の背中を押せるような言葉を掛けられる存在を目指し、これからも精進を重ねていきたい。

『やさしさ』の真髄に触れた日

伊崎田中(隅) 山端 真規子

心に深く刻まれ、人生の節目節目で私を支え、導いてくれる言葉があります。それは、「やさしいことをやさしく説くのはやさしい。やさしいことを難しく説くのはもっとやさしい。難しいのは、やさしいことを分かりやすく教えることだ。」という言葉です。

この言葉との出会いは、私が新任教師として教壇に立ったばかりの頃に遡ります。学級経営も授業も思うようにいかず、毎日が試行錯誤の連続で、悶々とした日々を送っていました。そんな時、たまたま手に取った一冊の本(残念ながら、その本のタイトルはもう思い出せません)の中に、この一文がふと目に飛び込んできたのです。

その瞬間、私ははっとさせられました。当時の私は、教師としての未熟さや、子どもたちへ

の接し方における傲慢さに気付かされたのです。難しい専門用語を並べ、自分の知識をひけらかすような教え方をしてはいなかったか。本当に子どもたちの目線に立って、彼らが理解しやすいように工夫していたか。自問自答する中で、自分の至らなさを痛感しました。

すぐに、手近なメモ用紙にこの言葉を書き留め、いつも目につく場所に置きました。以来、そのメモ用紙はボロボロになるたびに書き直し、今では何代目になるかも分からないほどです。この言葉は、私にとって教師としての原点であり、目の前の子どもたちに「難しいことを分かりやすく教える」ことを目指し、できるだけ多くの本を読み、多くの先生方の授業を拝見して学ぼうと努力する一步を踏み出すきっかけとなりました。

そして今、校長という立場になり、教職員や子どもたち、保護者の方々といった「人」を、真心と愛情を持って根気強く育てることの難しさを、日々感じています。時には壁にぶつかり、立ち止まりそうになることもあります。しかし、そんな時、この言葉がそっと私の背中を押してくれるような気がするのです。

これからも、この心に残るひとことを胸に、教育の道を歩み続けていきたいと思っています。

ある日の校長講話



私にも何かできることがある

花尾小(市) 猿 渡 司 郎

今日は「ハチドリのひとしずく」という物語から始めます。(本を読む) ハチドリという鳥は体長十センチ前後のとても小さい鳥で、空中で止まって蜂のように「ブーン」と音を出すので、ハチドリと言われています。とてもきれいな色なので「飛ぶ宝石」とも言われます。

主人公のハチドリ「クリキンディ」は、何百回も水を運ぶことから、小さい体なのに大きな勇気をもっているように見えます。

それにしてもなぜ他の動物たちは、山火事を消そうとしないで逃げ出してしまったのでしょうか。他の動物たちは意気地なしで卑怯だからでしょうか。

もしかすると、力持ちの大きな熊は、幼い子熊たちを守るために避難したのかもしれない。足の速いジャガーは、後ろ足で火に土をかけて消すことに気が付かなかったかもしれない。雨を呼ぶことのできる「雨降り鳥」は、水で火を消せることを知らなかったかもしれない。ハチドリのクリキンディは、他の動物のことをどう思ったのでしょうか。

ある先住民族は、クリキンディのことを次のように見えています。「他の動物たちの悪口を言っている暇があったら、自分のできることを淡々とやっていこうよ。」と言っているのだらうと。

私たち人間は、全ての生き物の中で最大の力を持つようになりましたが、残念ながら、傷つけ合ったり戦争や争いごとをしたり、自然を壊したりしています。

でも幸いなことに人間は、そのことを振り返り、反省し次に生かすことができます。その気になればクリキンディのように、力を合わせて森の火を消すだけの力を持っています。

これから二期が始まります。生活の中で困ったことやけんかがあるかもしれませんが。そんなときに、「私にも何かできることがある」「力を合わせてけんかやいじめの火を消そう」と思えたら、その瞬間に、解決に向かっていてのだと思います。この学校にも「クリキンディが何人もいる」と思います。

さて、話の続きが気になります。燃えていたあの森はその後どうなったのでしょうか。皆さんで考えてみてください。続きを考えた人は、校長先生にもお話を聞かせてください。

一学期を振り返り

『成長した新たな自分』

開聞中(南) 久 徳 寛 司

一学期最初の全校朝会で「未見の我」という話をしました。これまで見たこともない新しい自分を見つけられるような挑戦をしてくださいという話でした。

四月当初の自分の姿と今の自分と比べて、一学期を振り返って大きく成長できたことがあったと思います。また、新しい自分を見つけることができたのではないのでしょうか。

一学期には、三年生の職場体験活動や二年生の修学旅行、一年生の宿泊学習に合唱コンクールと、様々な体験活動を通して、皆さんの大きな成長や新たな自分を発見できたと思います。

そこで学校には、生徒会の役員や専門部長、学級委員長や専門班長、部活動の部長など、たくさんのリーダーがいます。また社会の中では、

地域の集落長、会社の部長や課長にお店の店長と、いろんな立場のリーダーが存在します。

生徒の皆さんは、このリーダーの役割をどれくらい意識して一学期に生活しましたか。学級や部活動に生徒会と、各リーダーの発言や行動によって、集団の行動は大きく影響します。活動する雰囲気が楽しくなったり、積極的になったり、逆にやる気が出なくなったりと、周りの雰囲気が変わっていきます。

皆さんは、これまで小学校のころから運動会などの学校行事を通して、みんなを引っ張っていくリーダーの活動を経験しています。そして同い年のクラスメイトの前に立ち「こうしよう!」と先導して、声掛けや注意することは、かなり勇気があることだと知っています。

リーダーが自分の役割を果たせるためには、一緒にいていく周りの集団のフォロワーシップ(助ける気持ちと支える行動)が大切になります。皆さんは、これから将来に向けて、人前に立ってみんなを引っ張っていく経験をたくさんしていきます。

二学期は、体育大会や文化祭に生徒会の引継ぎがあります。本校のリーダーである三年生は夏休みの高校体験入学や入試に向けての受験勉強に頑張っています。一・二年生の皆さんも、自分たちを成長させるために、リーダーの役割を意識した学校生活を考え、新たな成長した自分を見付けていきましょう。

「大丈夫だよ」と

声を掛けられる勇気を

出水高 橋 野 勝利

私が学生時代に、予備校で数学を教えていた時の話です。最初の講義で、最前列の生徒がラジカセを置き、ノートを叩く様子を見て、音楽を聴きながら手遊びをしていると誤解しました。しかし、講義後その生徒が質問してきた際に、彼が目の不自由な生徒だと気付きました。ラジカセは録音のため、ノートを叩いていたのは、点字で記録するためだったのです。

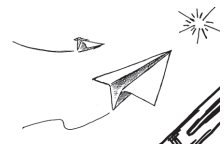
私は、グラフを使った説明ができないことに戸惑いましたが、彼が蠟紙と鉄筆を使ってグラフのパターンを確認してくれたことで、なんとか理解してもらえました。更に驚いたのは、講義後数名の予備校生が、誰に頼まれたわけでもないのに、彼のラジカセや荷物を持ち、次の教室へ誘導していったことです。彼らは皆、受験に必死な浪人生で、精神的な余裕も少ないはずなのに、その自然な振る舞いは感動的でした。その後も彼は私の講義を選択し、講義終了後には、聞き取れなかった箇所の確認を待っていた予備校生たちが、彼を次の教室へ誘導するのが常となりました。ハンディをものともせず努力する彼の姿勢と、それを支える生徒たちの他

者への思いやりは、予備校中の皆を勇気付けていたように思います。彼らは、受験という目標に向かう仲間として、支え励まし合う「団体戦」の更上のステージを見せてくれました。

人にはそれぞれ困りごとがあります。周囲に対する少しの思いやりや優しさがあれば、社会や学校はより住みやすく、楽しくなるはずです。しかし残念ながら、現実には人を傷つける言葉をつかう人や、利己的な主張をする人もいます。本校で学ぶ皆さんには、そうした人間になつてほしくありません。他人の困りごとに気付き、「大丈夫だよ」と声を掛けられる勇気を身に付けてほしいと思います。自分だけでなく、皆が人生を楽しめるようにという願いを、胸の中に持ち続けてください。



話のひろば



ゴキブリの

研究から

九玉小(南)

西 康 隆

世の中、何が幸いするのかわからないものである。最初はおふざけのつもりが、やってみるとなかなか面白く、その後の自分の生き方に影響を与えることもめずらしくない。

それが中学生の時。夏の自由研究のテーマとした「ゴキブリの研究」である。家族や周囲からは一か月間奇異な視線を向けられたが、当時の理科の先生から「このテーマは多分誰もやらない。面白い。」と言われ、自由に理科室の道具などを使わせてくれた。誰も見向きもしない、誰も考えつかないであろうことに真面目に取り組んでみると、独特の充実感があり達成感もある。その時の理科の先生には大変感謝している。これまで赴任した多くの学校でこの話をしたが、よほど強烈な印象だったのか、多くの

子が覚えていららしい。

話は変わるが、教育に限らず様々な分野において、創造性というものの重要性が言われて久しい。近年ではコンピュータと人間を比較し、人間の優れた特性の一つとして取り上げられることがある。

先日、南日本新聞の記事で美術家の藤浩志さんという方が、「創造性酵母菌」というものを載せていた。藤さんによると、「つまらない・何もない」という感覚は実は可能性の種であり、モヤモヤや違和感こそが行動や活動、表現に繋がる切実な動機になるとしていた。

創造的思考力は、学力と別物ではない。かといってイコールでもない。自由に発想する環境や時間があればよいというものでもなく、ある程度の制約は必要である。そこで重要なのは、実は創造に向かう態度や構え、そして粘り強さである。これには多くの研究結果が示すエビデンスがある。今でいうところの学びに向かう力・人間性であろうか。

児童生徒に創造性や創造的なものを求めることは大切であるが、自分は子どもの発するモヤモヤや違和感、追究しようとする意思を真摯に受け止め、表現や行動に繋げられるだけの環境をつくられているだろうか、時々考えることがある。結局のところ、その子にどう寄り添った行いができるかどうかということだろうか。ゴキブリの研究を発端に考える時がある。

教師の醍醐味

甲南中(市)

岩 脇 勝 広

「いい調子だ。この調子で明日も頑張れ。」この魔法の言葉を今でも鮮明に記憶しています。中学

時代、勉強が苦手だった私に、担任の先生は真摯に向き合い、毎日家庭学習の添削をしてくださいました。そのおかげで勉強が好きになり、英語教員の道を歩むことになりました。

私は、南九州市の知覧中学校の出身で、当時は全く勉強する生徒ではありませんでした。しかし、中学三年生の時に出会った担任の先生が私のやる気スイッチを押してくれました。先生は私の可能性を信じ、毎日励ましの言葉を掛けてくれました。その結果、私は勉強に対する意欲をもち始め、成績も徐々に向上しました。この経験が、私が教職を目指すきっかけとなりました。

教員となった今、勉強が苦手な生徒に寄り添い、学ぶ楽しさを伝えることを大切にしています。高校進学が難しいと言われた生徒が合格し、お母さんが涙ながらに感謝を伝えるにわざわざ日曜日に自宅まで来てくださった時の感動は忘れられません。

また、県の英語スピーチコンテストにも挑戦させ、中学校で三位に入賞した生徒が、一位になれなかった悔しさをばねにして高校でも頑張りが続け、高校三年生の時に県大会優勝。その生徒から喜びの手紙を受け取った時、胸が熱くな

りました。

近年、教員の働き方が問題視されますが、生徒が夢をつかむ瞬間に立ち会えた時、その喜びは何にも代えがたいものです。将来を担う子供たちを育てる素晴らしい職業として、教員の魅力を多くの人に感じてもらいたいと思います。役職定年まであと半年、これまで以上に情熱をもって取り組んでいきたいと思っています。

教員としての経験を通じて、私は多くの生徒たちの成長を見守り、彼らの夢をサポートすることができました。これからも、生徒たちが自分の可能性を信じ、夢を追いかける手助けをしていきたいと思っています。教師という職業は、まさに人生を変える力をもっているのです。



鹿児島郡の中学校に行ってみませんか。

高等特支

赤 池 賢 二

「三十数年ほど前の秋、当時東京から地元に戻ってきた失業中の私に県教委教職員課の先生から、「鹿児島郡の中学校に行ってみませんか?」と言われ、「鹿児島郡? 吉田町? 桜島?」などと思いを巡らせていた。「十島村の悪石島です。」と言われ、私の教師生活がスタートした。今年の夏、トカラ列島群発地震で全国的に大きく報道されている十島村立悪石島小中学校(現在の悪石島学園)である。

当時は児童一人の小学校で中学生が一人転校するため、急遽、閉校していた中学校を開校しなければならなかった。悪石島の場合もよく分からないまま十月末、村営船に乗り、人生初めての船酔いを経験し、悪石島に赴任した。

港では多くの島民の方々に迎えられ、その近くに遭難した外国船籍の船が横たわり自然の驚異も感じた。社会科の教員免許はもっていたものの教職経験など全くなかった私は、もう一人の同じ境遇の先生と担任、副担任に分かれ、他教科や小学生も含めた体育や音楽にも取り組んだ。当時の校長先生や同僚の方々に助けられ、今を思えばとても恥ずかしい授業を四苦八苦しながら取り組んだ。そのような自分を島民の皆さんが「先生」と呼ぶことにたいへん恥ずかしさを感じながらもうれしく感じていた。

保護者や島民の皆さんにはとても仲良くして

いただき、文化祭などの行事も島民挙げての一大行事になり、地域に学校があることの大きさを実感した。

今年に入り、この悪石島を含むトカラ列島の群発地震で多くの方々が、避難を余儀なくされている。現在、私が勤務していた頃よりも児童生徒数が増え、留学生のための寮があるなど学校周辺の環境も整っているが、テレビで避難の様子を見ていると避難されている方々の中に当時お世話になった方々を数人見つけ、懐かしくあり、また、胸が痛む思いでもある。早く地震が収束し、元の生活に戻ることを願っている。

私が教師として思い出深い、幸せなスタートが切れたのは、校長先生や同僚、生徒、保護者、地域の多くの方々のお陰である。これから教師を目指す方々が初めて赴任し「先生」と呼ばれる第一歩が幸多いものであるようお願いしている。



読書案内



■ 安達未来 著

締め切りより早く提出された

レポートはなぜつまらないのか

神之嶺小(大) 川 畑 智 巳

仕事をする上で、やらなければならないことを後回しにする派(先延ばし派)なのか、やらなければならないことをすぐにやる派(前倒し派)なのか分かれるのではないかと思う。本書は、「先延ばし」と「前倒し」について、最新の心理学をもとに明らかにしていくことを目的としている。私自身、振り返ってみると、「先延ばしは悪、前倒しは善」という思い込みがあったように思う。しかし、「先延ばし」には、検討する時間を十分に取ることができる等メリットもある。また、「前倒し」には、早く取り

掛かりすぎて、新たなコストやトラブルを生んでしまうこともある等デメリットもある。どちらもメリット、デメリットがあるということが言える。筆者は、まとめとして、「先延ばし」と「前倒し」は、対極の関係にあるとは言えないとし、どちらがよいかではなく、両者のバランスが必要であるとの結論に至っている。

管理職になり、職員の様子を見ていると、「この職員は、先延ばし派だな。」「この職員は前倒し派だな。」と大きく分けることができているように思う。それができると、「今度の企画は、少し早めに取りかかってみたら。」とか、「今回はまだまだ時間があるから、ここを掘り下げてみたら。」等、一人一人に応じたアドバイスに繋がり、結果的に仕事の効率化や深まりに繋がっていくことになった。管理職として、「先延ばし」と「前倒し」の視点で職員の行動を把握することは職員指導上必要なことの一つであると考え。

では、私は、「先延ばし」派か、「前倒し」派か、どちらであるか、または、あったか。私のこれまでを振り返ると様々なことが思い出されるが、どちらかと言えば、「前倒し」派に入るのではないかと思う。もちろん、「先延ばし」の経験も多々あるのだが…。

「先延ばし」と「前倒し」。これまでの自分の行動を振り返りながら、また、心理学の世界の面白さを感じながら読めた一冊であった。

光文社 九百九十円

学校を改革する

月野小(隅) 小原 和 博

教育は、子供の自立を目指して行うものだが、自立の第一歩は、他者依存であると言われていく。他者に依存できる子供は自立できるという考え方である。

このような関わり合いを可能にするのが、「学び合い」のように思う。「学び合い」は、分らない子供の「ねえ、ここどうするの。」から出発する。この質問に応える子供は、つまづいている友達をつまづきを理解し、つまづいている友達に分かるように説明しなければならぬ。その援助の言葉を受けて「ねえ、ここどうするの。」を発した子供は懸命に思考しなければならぬ。この他者の援助を媒介とする思考によって、分らない子供は一人で学ぶことの限界を超えることができる。

本書には、そのような他者依存の関係を土台に、一人残らず子供の学ぶ権利を保障し、一人残らず教師が専門家として成長する学校にするにはどうすればよいのかについて書かれている。そして、学校を子供たちが学び合う場所にするだけでなく、教師たちも専門家として学び、育ち合う場所として、親や市民も改革に参加し、協力して学び合う「学びの共同体」という理念を提唱されている。

教育の在り方にゴールはない。私たち教職員も分らないことを一つ一つ学びながら、「話し合い」ではなく「聴き合い」を、「教え合い」ではなく「学び合い」を評価軸にしながら、学校改革を進めていきたい。

全ての子供たちの学びを保障できるように、分らないことが大切にされる授業づくりに向けて、全身全霊で取り組んでいきたいと思えるような本との出会いであった。

岩波書店 六百三十円＋税

■ やなせたかし 著

明日をひらく言葉

霧島高 横山 謙二

読書と縁遠い私にとって、この執筆は苦痛でしかなかった。今更ながら本を読む習慣を身に付けておけばよかったと後悔している。とは言え、執筆のためでもあるが、校長になり二年目。校長講話のネタもそろそろ尽きかけていたので、書店に足を運んだ。ちょうど朝の連続ドラマの主人公（ドラマでは奥様）でもあったので、手に取ってみた。

やなせさんは一九一九年生まれ。二〇一三年に九四歳で逝去された。我々がよく知る「アン

パンマン」は七〇歳の時にアニメ化され大ヒットしたそう。三七年前のことだ。この本には、そんな筆者の奇想天外の人生と共に、「アンパンマンマーチ」の歌詞にもある、「何のために生まれて、何をして生きるのか」を考えさせる言葉が綴られている。中でも私が一学期終業式で生徒に紹介した言葉は、「人は人を喜ばせることが一番うれしい」であった。本校で何を学び、どんな目的を持って卒業していくのか自分の力で人を喜ばせるための進路選択をしてほしいという話に結び付けた。

戦争を体験した著者は、正義と善悪について、いくつかの言葉を残している。正義のための戦争なんてどこにもないことを「正義はとても不安定なもので、ある日突然逆転する」と訴えている。また、「逆転しない正義とは献身と愛」なのだそう。私が幼い頃テレビにかじり付いて観ていた「ウルトラマン」でさえ、「戦争賛美」のように思えるのだそう。筆者が思う正義とは、「悪人を倒すことよりも、弱い人を助ける」「正義の味方はカッコよくない。傷つくことを覚悟する」アンパンマンのように自分の顔をちぎって食べさせる。そういう捨て身、献身の心なくして正義は行えないのだそう。

生徒指導という名の正義感から、悪を正してきたつもりだった頃を思い出す。筆者の思いを知った上で、もっと真剣にアンパンマンを観ていたら、真の正義の味方の生徒指導ができたのではないかと痛感させられた。

PHP文庫 八百十四円

きっかけは、九十歳でトライアスロンに挑戦している人のテレビ番組を見たことだった。その人は、七十歳から競技をはじめたという。自分にもできるかもしれないという思いから鉄人レースやトライアスロンに出ることが夢となった。

この歳で夢がもてるなんて、それこそ夢にも思わなかった。子供たちには、夢や目標をもってと言っている割には、仕事以外に目標をもって何かをするということをも、恥ずかしながらほとんどしてこなかった。それだけに、九十歳という高齢にもかかわらず、挑戦を続けるこの人から尊敬し、自分もそうなりたいたいと思った。さて、こんな私だが、これまで趣味と聞かれると、困ることが多かった。正直に言えば無趣味になるが、そうとも言えず、読書やドライブ、映画鑑賞等、と答えていた。それも全くしないのではないのだが、語れるほどの趣味ではなかった。

教頭をしていた頃は、そのほんの少しかじっている趣味さえなかなかできなかった。当時仕えていた校長先生からは、「忙しいからと言って、学校と家を往復するだけの生活は良くない。趣味をもて。」と指導されたが、なかなか充実した趣味をもてるだけの時間も心の余裕もなかった。

現在は、私生活で子育てに一段落ついたこともあり、心の余裕も若干出てきたところである。そこで、さて、趣味でもやってみようか、というわけではないが、じっとしていることが性に合わないので、時間を見つけては、以前途中で

趣味・文芸



夢は鉄人

東原小(隅) 森

山 新 二

やめてしまったこと等に再度、少しずつチャレンジしているところだった。その矢先に、冒頭のテレビ番組を見て、これだ、と思ったわけである。それからは、費やす時間が増え、徐々に大会に向けての練習という意識が出てきていく。まず、一つめはランニング。と言っても、ジョギングでさえなく、ウォーキングとジョギングの間くらいの超スロースピードで、やっとのことで走っている。それでも、本人としては、大満足である。

て泳いだばかりだ。どれもとても大会に出られるレベルではないが、何しろ「夢」なので、ご容赦願いたい。始めたばかりであり、ジョギング大会にも出ていないので、とりあえずは十キロか二十キロの大会での完走を目指す。その後、フルマラソン、トライアスロンといければいいが、夢はそのずっとずっと遠くなる。とりあえずは、走ることを楽しむことにしたい。走って帰ると決めた日は、朝から楽しい。わくわく、子供のような気分だ。休日は、翌朝走るのが楽しみでなかなか寝付けない。そのような中で、この趣味が、校長職のストレス発散になっていることに気付いた。教頭の時には、事務量の多さから、校長になればもう少し時間がとれるだろうと、楽観的な考えがあったが、これは間違いであった。事務量は確かに減るが、一つ一つの判断に

遠回りをして一時間走ることもある。ただ、二日に一回ほどしか走ることができない。練習時間が短いので、できるだけ、土・日曜日の朝、一時間程度は別に走るようにしている。それでも、練習時間が短いので、夏休みは平日の朝もできるだけ走るようにしている。

二つめは、自転車である。もちろん、こちらもおじさんスピードで、歩行者や自動車の邪魔にならないようにゆっくり走っている。こちら土・日曜日の朝、一時間程度しか、まだ走っていない。

三つめ、スイムだ。こちらも、まだ始めたばかりで、先日一時間かけてやっと二キロを続け

相当に時間と労力がかかる。子供・保護者・地域・職員等、様々な人々の思いを十分にくみ取っていかなくてはならない。また、みんなの思いに沿うことができないことも往々にしてある。簡単にはいかない。そして、迷いも多く、走りながら、色々な人々に思いを馳せたり、自分の考えを整理したり、納得させたり、もしくは無心になったりする。その度に、このような時間があって、ほんとうにありがたい、この趣味によって助けられている、と思う。

このような心地よく充実した思いを乗せて、私はこれからも鹿屋の町を走り続けることだろう。

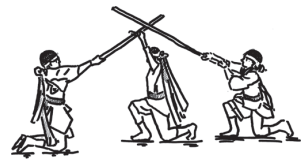
郷土の紹介

「永久に吉地たれ」

歴史の香り豊かな永吉

永吉小(日)

那 須 広 代



一 はじめに

本校区は、日置市の南部に位置し、永吉地区と坊野地区から構成されている。北に日吉町吉利、南に吹上町田尻や小野、東に鹿兒島市入佐町や平田町、西は東シナ海に面している。悠久の時を感じる「永吉太鼓踊り」や「疱瘡踊り」などの伝統芸能が、今も受け継がれている。

また、坊野地区には、縄文時代の遺跡発掘で知られる「黒川洞穴」、永吉地区には、戦国時代を色濃く残す「南郷城跡」や「天昌寺跡」がある。ロマンを誘う史跡も多数点在しており、歴史の香り豊かな校区である。

二 黒川洞穴

黒川洞穴は、古代人の生活や風習を伝える生きた史跡で、洞穴遺跡として全国的にも稀少な存在である。縄文時代から平安時代に至るまでの長期間使用された巨大な洞穴で、四回の発掘が行われた。黒川式と名付けられた土器や石器等の道具類、大量の貝殻、動物の

骨、約三千年前とされる埋葬された女性の骨も発見されている。洞穴発掘のきっかけは、坊野小学校(昭和五十五年閉校)の教諭が、学校に保管していた土器の破片や貝殻などを県の方々に見てもらったところ、縄文式土器の破片等であることが分かったのが発端である。遙かな縄文の時代に思いを馳せる空間として、坊野地区の人々に大切にされてきた。

三 南郷城址と六地藏塔

南郷城は、本校の裏にそびえる標高九十四メートルの山に築かれていた。平安時代の末期から永吉の統治者として十代にわたり居城していた桑波田氏一族が建立した山城址である。天文二年(一五三三年)南郷城合戦により、戦国武将、島津忠良(日新公)と貴久が攻め取った。その時に、それまで「日置南郷」とよんでいた地名を永久に吉い土地であるようにと、「永吉」と改名したと伝えられている。

永吉の麓には、六地藏塔がある。島津忠良が、南郷城合戦の後に建立し、大法要を行い、敵味方の区別なく御霊を末永く供養したと言われている。この供養塔は、六面体になっており、それぞれの面に異なる地藏仏が彫ってある。六地藏塔は、日新公の孫の島津義弘らにも受け継がれ、九州を中心に十数か所ほどあるが、その最初に建立されたのが、永吉にある六地藏塔である。この六地藏塔の供養祭を三年に一度、地域の歴史ボランティア団体を「永吉南郷会」が行っており、本年度(令和七年度)も開催された。

四 天昌寺跡と島津豊久

天昌寺跡は、関ヶ原の戦いで、活躍した武将のひとりである島津豊久以後の永吉島津家歴代の領主及び家族の墓地である。ほとんどの墓石は、高さが三メートルを超すほどの大きな五輪塔であり、それぞれが林立している墓石群は全国でも珍しいと言われている。

その墓石群の中でもひときわ大きい墓が、島津豊久の墓である。豊久は、薩摩軍の副将格として関ヶ原の戦いに参戦した。徳川勢の追手が厳しく洪難を極めた際に、大将である義弘を故郷へ返すため、敵中突破の中、壮烈な戦死を遂げた。あまり知られていなかったが、豊久を主人公とした「ドリフターズ(漂流者)」という漫画が発行され、戦国武将の中で、最も勇敢で若くて美男子な鋭い武将として描かれた。この漫画により、多くの人に知られることとなった。この天昌寺跡にも県外からたくさんの方が訪れている。

五 おわりに

美しい自然と古くからの歴史資産が融合した深い魅力をもつ永吉。縄文の面影を伝える遺跡から戦国期の石塔や寺跡など時間を超えた文化を感じられる。そして、これらは、地元の人々の手で守られ、未来へつなぐ取り組みが進められている。これからの未来を担う子供たちを地域と共に支えていきたい。

「永久に吉地たれ」永吉。

総務部だより

総務部は、四月二十三日の定期総会において承認された活動方針や活動内容に基づき活動している。今年度は各種会合等が予定どおり開催されており、その一部を報告する。

一 地区校長会との連絡会

六月十四日に開催した大島地区校長会との連絡会を皮切りに、各地区校長会との連絡会を開催している。連絡会では県連合校長協会の活動状況を報告し、各地区校長会の現状や課題等の説明を受け、これらを基に意見交換を行っている。主な話題については次のとおりである。

(一) 校長協会事務局から

ア 鹿児島県連合校長協会について

イ 九州・全国大会の際の校長会からの補助金について

ウ 学校予算の要望、人事・給与の要望について

エ 校長会館について 等

(二) 小学校部会から

ア 全国連合小学校長会について

イ 中央教育審議会諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」等

(三) 中学校部会から

ア 全日本中学校長会について

イ 中央教育審議会初等中等教育分科会企画特別部会の審議について 等

(四) 各地区校長会から

ア 九州・全国大会参加に係る旅費及び協会予算について

イ 中学校部活動地域展開の進捗状況等について

ウ 教頭職の処遇改善について

エ 教員不足及び働き方改革について

オ 特色ある教育課程の編成について

カ 土曜授業の今後の見通しについて

キ 月刊「鹿児島県教育」等の広報誌の発行について

二 教育関係機関・諸団体との連携

本会では各種教育関係機関や団体との連携を強化するために連絡会を開催してきている。今夏は県教委、PTA連合会との連絡会を予定どおり開催した。

「県教委との連絡会」は、七月二日に開催し、地頭所恵教育長を始め、副教育長、各課長等との意見交換、情報交換を行った。秋には主に教職員課との連絡会を開催する予定である。

「県PTA連合会との連絡会」は、七月十二日に開催し、連携の在り方について意見交換を行った。

主な話題は、次のとおりである。

(一) 県連合校長協会からの事業説明

ア 令和七年度の運営方針

イ 各専門部の活動方針・活動内容 等

(二) 県PTA連合会からの事業説明

ア 基本方針・力点

イ 県P五つの実践、施策 等

(二) 意見交換

「県連合校長協会と県PTA連合会との連携の在り方」のテーマに基づき、連携の重要性を再確認し、様々な取組の状況について活発な意見交換がなされた。

三 教育予算等に関する要望

各地区校長会・県立学校からの要望を庶務担当者会で集約し、生成AIを活用して原案を作成した。その後、七月三十日の総務部会での審議及び八月四日の役員会での検討を経て、八月二十五日の常任委員会承認された。今後、十月二十八日に「人事並びに給与に関する要望」と併せて県教委に直接要望する予定である。

四 総務部会

総務部は小・中・高・特の四校種による連合校長協会の活動を総合的に推進する役割を担っていることから、諸団体や各地区及び各市町村校長会との連携を深め、学校経営上の喫緊の課題に対処するよう、活動の充実に努めている。毎年二回の部会を計画しているが、今年度はハイブリッド型(対面とオンライン)の部会とし、第一回を六月十一日に、第二回を七月三十日に開催した。第一回では、各種部会長からの報告の後、令和八年度学校予算に関する要望書作成について協議が行われ、小・中分科会、高・特分科会に分かれて情報交換が行われた。寄せられた要望事項については、第二回総務部会で審議を重ねた。多くの校長の願いが県教委・市町村教委に届くよう活動を進めたい。

学び続ける人は、たとえ 80歳でも若いと言える。

(ヘンリー・フォード 1863～1947)

心を常に若く保つことは
最も素晴らしいこと。
向上心を大切にしたい。



鉄浜海岸サーフスポット

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」
松山 武史 氏



一般財団法人松山武史氏

先月号でお知らせしたとおり、令和七年十二月十四日(日) 十四時より、県医師会館大ホールにおいて、教育講演会を開催します。

先月号で未定だった講師については、一般社団法人チェスト連合代表理事の外山雄大氏に決定しました。

外山氏は、薩摩剣士隼人の生みの親として知られる方です。他にも、鹿児島PRキャラクターぐりぶーのプロデュースもされていらつしやいます。過去には、かごしま国民文化祭開会式、明治維新百五十周年記念事業、本格焼酎の日フラッシュモブなど、様々なイベントの総合プロデュースを手がけていらつしやいます。

興味深い御講演になるものと期待しております。当日の演題などについては、また御連絡いたします。

季節の言葉「名月」

名月を取ってくれろと 泣く子かな

小林一茶

編集後記



二学期が始まりました。七月にはトカラ列島で群発する地震により、不安で眠れない夜を過ごされた住民の皆様も多かったと思います。心からお見舞い申し上げます。また、子供たちの安全・安心の確保に向け、日々尽力なされた学校関係者の方々に敬意を申し上げますとともに様々なご苦労に対して労い申し上げます。二学期が不安なく過ごせますことをお祈り申し上げます。

さて、私の夏休みは部活動生徒の県中学総体の応援から始まりました。猛暑が続く中、ひたむきに競技をする姿に感動を覚えました。勝負は必ずつきませんが、負けて涙する姿を目にし、胸が熱くなりました。また、ホールいっばいに音を響かせて演奏する吹奏楽部の姿にも同様の思いになりました。一年間の努力が集約された十二分の演奏でした。

現在、国は学習評価の在り方について検討しています。「主体的に学習に取り組む態度」については観点別評価から外れるようです。「学びに向かう力、人間性等」の涵養が軽視されないか心配なところです。

非認知能力の育成は、私たち教職員の重要な責務だと考えます。部活動生徒の姿を見ながら頑張る力や頑張る力を有する生徒を育成したいなと心から思いました。そのために主体性とか粘り強さとか自己効力感とか……様々な非認知能力の育成が必要となります。授業や学校行事、生徒会活動等はどうあればよいか、職員とこれから語っていききたいと思っています。

末筆になりますが、今月号も数多くの玉稿をお寄せいただきましたこと、深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

松永 英一(桜丘中学校)